

改めて 大齋節について

司祭 エドワード 宇津山 武志

「大齋節」とは読んで字の如しで、大きな齋(いつき・ものいみ)の期節で、東方正教会ではそのまま「おおものいみ」と読みます。神道の言葉で、「祭事において神を迎えるために、一定期間飲食や行為を慎み、不浄を避けて心身を清浄に保つこと。」とあります。

キリスト教における「ものいみ」についての最初の言及は、発見されているものとしては1世紀の文書「ディダケー(十二使徒の遺訓(「教訓」とか「教え」などと訳されることもあります))」に見出されますが、元来旧約時代からの宗教的な習慣を継承したものだと言えるものです。近年、ことに西方系の教会では、「ものいみ」の守り方についての規定はずいぶん緩和されてきました。今もこれを厳格に守っている東方正教会から見たら、それは墮落と映るのかもしれませんが。「ものいみ」は、主に食物についての規定がクローズアップされることが多いのですが、この期間を通して遊興などを控え、行いを慎み、祈りを増やし、学びの機会を積極的に設け、キリストと教会のための働きを増やすことが勧められています。ですから「ものいみ」が「断食」だけを指すものでないことは言うまでもありません。初代教会以来の伝統に連なるカトリック教会・聖公会といった西方系の教会では、伝統的に、「悔い改め」・「回心」を扇のかなめとして、その具体的な表現、表明、あるいは道具や手段として「祈り」、「断食」、「慈善」があると理解されてきたのですが、近年は実践よりも精神的な側面が強調されるようになってきたように感じられます。

大齋節中の肉体的な断食は、大齋節を歩む信仰者の霊的な糧となること、そしてその霊の糧の養いは、教会暦の一年の信仰生活を歩む滋養となるものです。この繰り返しによって、わたしたちの信仰生活は深められていくわけで、実際の断食が信仰そのものをいかに豊かに育むかということは、疑う余地がありませんし、決して忘れてはならない、もう一度正しい評価を与えられるべきものだと思います。

では具体的に断食と言いますと、「何も食べない」ことをただイメージしてしまいがちですが、規定としては随分と緩和された「西方教会＝カトリック教会」の例を見ますと、大齋と小齋とに分けられていて、大齋は、「1日に1回だけの十分な食事とそのほかに朝ともう1回わずかな食事をとることができ、満60歳に達するまでのすべての成人が守る。」とあり、小齋は「肉類を食べないことですが、各自の判断で償いの他の形式、特に愛徳のわざ、信心業、節制のわざの実行をもって替えることが

でき、満14歳以上の人を守る。」と定められています。用語が入り組んでいてわかりづらいですが、聖公会の暦にある「大齋節」を通しての「齋日」の過ごし方が、カトリック教会の規定における「大齋」に該当し、大齋節中でもことに大齋始日(灰の水曜日)と聖金曜日(受苦日)に示されている「断食日」が、カトリック教会の規定における「大齋」と「小齋」の両方足したものであると理解してよいと思います。かなり簡単に言い換えますと、朝食と夕食は食べ、昼食を「もう一回のわずかな食事」として摂る。大齋始日と聖金曜日はこれに加えて肉類も断つというものです。精神的にも肉体的にもこれだけでかなりきつく感じられるはずですが、だから、カトリック教会では14歳以上60歳未満と規定しているのです。昔からしばしば耳にする、煙草やコーヒー、お酒といった嗜好品を断つとか、好きなものを我慢するとかいうのは、少し意図するところが違うことがわかるでしょう。

上の方法が無理な場合でも、普段よりもおかしな一品でも減らして、減らしたことを「大齋節」という視点から受け止め、意識しながら過ごしてみることも可能です。一品減らしたおかしなで浮いたお金を、感謝をもって、命をつなぐ食べ物にありつくことのできない人々がいることを覚えて、その人たちと糧を分かち合うことを祈りつつ、ささげていただきたいと思うのです。こうして大齋節の指針である「祈り」、「断食」、「慈善」という三つのテーマがそれぞれ独立したものではなく、一つのサイクルとしてつながりあい、循環しつつ深まっていくことを体験することができるでしょう。

無理のし過ぎはいけません、まるで無理のない克己・修煉というものもありません。いつもより少しだけ犠牲を払い、この克己の期節をただただ信仰の糧となることを祈りつつ、一步一步、一日一日を大切に歩んでまいりましょう。そしてご一緒に感謝と賛美のご復活日を迎えたいと思います。

(藤沢聖マルコ教会 牧師)

聖マルコ教会月報「きずな」3月号 巻頭言